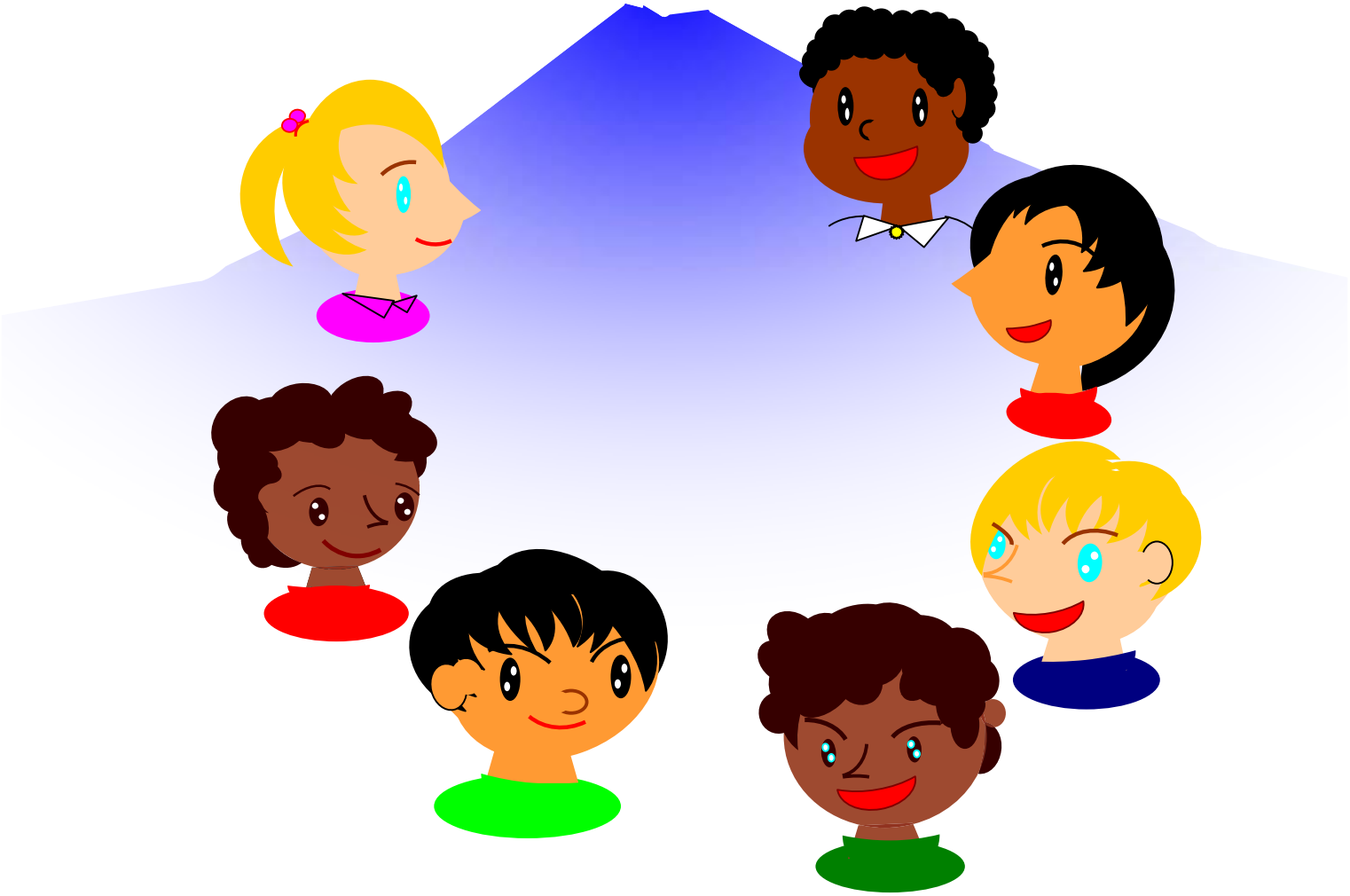
はじめての日本語と
クラスの仲間づくり

～日本語初期指導カリキュラムと指導プラン～



は　じ　め　に

４週間のプレクラス（初期指導教室）を想定したこの日本語初期指導カリキュラムを作成するに当たり、最初に配慮したことは、「日本語が全く分からない子どもたちにとってまず必要なことは何か」ということです。

日本語が分からない子どもたちは、突然日本にやってくることが少なくありません。慣れ親しんだ国、地域、学校を離れ、先生や友だちとも別れ、それまで知らなかった日本語、教科、生活習慣・文化等の海（日本社会）に放り出されることになります。来日したことによって、さまざまな環境との「つながり」を失った状態に陥るともいえるでしょう。それがどれだけ心細く不安なことか、想像に難くありません。

この子どもたちは、プレクラスで学習した後、基本的に該当学年の在籍学級に入ります。そのため、プレクラスでの学習内容は在籍学級での生活にすぐに役立つものである必要があります。そこで本カリキュラムでは、何よりもこうした子どもたちと学級の仲間との間に「つながり」の糸を紡ぎたいと考えました。簡単な日本語表現を覚え、それらを使って級友とのやりとりを進めていければ、在籍学級の中に少しずつ「仲間」ができ、やがて安心して学校に来られるようになるでしょう。カリキュラムを使った学習で平仮名を知ることにより、友だちの名前も覚えることができます。また、在籍学級の先生にも協力していただきながら、一緒に楽しく給食を食べるのも「仲間づくり」につながることと思います。

一方で、異なる文化を持った子どもたちとのふれあいは、日本人の子どもたちにとってもかけがえのない経験です。外国と日本の文化が出会うことによって、そこにはどのような新しい世界が見えてくることでしょうか。考えただけでもわくわくします。
本カリキュラムは、日本語が分からない子どもたちのためのものですが、その子どもたちを在籍学級にどう迎え入れるかという内容の指導案も組み込まれています。貴重な出会いの場を利用し、日本の子どもたちにとっても実りある学びとなるようにと考えました。
また、４週間の指導プランの中には、日本語指導にあたる先生方はもちろん、休み時間等を利用して在籍学級担任の先生方にも使える指導内容や活動があると思います。ぜひご活用ください。

本カリキュラムが、未来を担う子どもたち同士の「つながり」を生み、今後の多文化共生社会実現のための一助となることを願ってやみません。

2012 年３月

静岡大学教職大学院　　矢崎　満夫
静岡県教育委員会　　学校教育課

目　次

○本カリキュラムを使用するにあたって …… 1

○日本語初期指導シラバス …… 3

○日本語初期指導カリキュラム指導日程 …… 5

○指導プランの読み方 …… 8

○指導プラン

- １日目 …… 9
- 給食編 …… 14
- ２日目 …… 16
- ３日目 …… 20
- ４日目 …… 24
- ５日目 …… 27
- ６日目 …… 30
- 交流給食編 …… 33
- ７日目 …… 38
- ８日目 …… 40
- ９日目 …… 43
- 10 日目 …… 47
- 11 日目 …… 51
- 12 日目 …… 56
- 13 日目 …… 61
- 14 日目 …… 69
- 15 日目 …… 74
- 16 日目 …… 79
- 17 日目 …… 83
- 18 日目 …… 90
- 19 日目 …… 95
- 20 日目 …… 100
- 平仮名指導のヒント …… 104
- 在籍学級の担任による学活指導① …… 107
- 在籍学級の担任による学活指導② …… 109
- 在籍学級の担任による学活指導③ …… 112

○参考資料 …… 114

本カリキュラムを使用するにあたって

1　外国にルーツを持つ子どもに特別な配慮を

平成 23 年５月１日調査では、静岡県には、小学校に 2,526 人、中学校に 1,330 人、合計で 3,856 人の外国人の子どもが在籍しています。

これらの外国人の子どもの中には、保護者と一緒に来日した子どももいれば、保護者の日本での生活が落ち着いてから来日した子どももいます。さらに、保護者が日本人と国際結婚をしたり、日本国籍を取得したりしたことにより、法律上は外国人ではないけれども、外国にルーツを持つ子どもも存在しているのが現状です。

子どもの多くは、日本語が分からない状態で来日し、十分に日本語を身に付けていない状態で生活をしています。そして、保護者が日本の小中学校へ就学を希望した場合、６歳を超えていれば小学校に、12 歳を超えていれば中学校に入ることになります。外国にルーツを持ち、日本語が分からない子どもは、日本の各学校において、どのような思いを持つのでしょうか。保護者等の事情によって日本に住むことになり、言葉の通じない集団の中に入って生活する子どもの気持ちを想像してみてください。それぞれの子どもは、特別な配慮を必要としているのです。

2　カリキュラムのねらい ①意思疎通に必要な表現と文字 ②仲間づくり

そこで、外国にルーツを持つ、日本語が分からない子どもを支援するための一つの手立てとして、「日本語初期指導カリキュラム　～はじめての日本語とクラスの仲間づくり～」を作成しました。本カリキュラムのねらいは、二つあります。まず、意思疎通に必要な最低限の表現と文字（平仮名）を身に付けさせることです。もう一つは、身に付けた表現や文字を使って、在籍学級等の子どもと仲間づくりができるようにすることです。

本カリキュラムは、基本的には、小学校低学年の子どもを想定して作成しています。しかし、初期指導において、使えるようにしておきたい日本語（意思疎通に必要な表現や平仮名）は、小学校１年生であろうと中学校３年生であろうと変わりはありません。ですから、小学校中学年以上の子どもに対しても、多くの部分を適用することができます。（ただし、その学年に必要な指導項目を追加する必要はあります。）

3　初期日本語指導に必要な時間数等は子どもの実態に応じて柔軟に・・・

本カリキュラムは、各市町によるプレクラス（編入学直後の子どもを対象とする初期指導教室等）や学校内にある国際教室等における初期日本語指導の目安となるものです。必要な時間数は、１日２時間×20 日間、合計 40 時間で設定していますが、これは、一つの目安にすぎません。学校や子どもの実態によっては、１日３時間を 20 日間というように設定し、60 時間で行うということもできます。また、表現や文字を覚えることは、学校の学習だけでは十分ではありません。家庭での学習も必要です。この指導プランでは、家庭学習の欄を設け、子どもに家庭でも学習することを求めています。

４　本カリキュラム修了が、日本語指導終了ということではない

本カリキュラムでは指導時間を限定しているため、指導内容を最低限に絞っています。そのため、文字表記については平仮名のみ、算数については、簡単な足し算までしか扱うことができませんでした。

本カリキュラムが修了したからといって、日本語指導が終わったわけではありません。語彙も少ないと考えられます。また、意思疎通に必要な最低限の表現のみに絞っているため、基本文型や教科内容等の学習についてはほとんど扱っていません。しかし、日本の学校で、その子どもの成長を保障するためには、文型や教科の指導は欠かせません。本カリキュラム終了後も、継続した日本語指導が必須であり、並行して教科指導も行っていく必要があることを忘れないでください。

５　日本人の子どもが異文化を理解し共に生きていこうとする姿勢を育む

本カリキュラムは、外国にルーツを持つ子どものためだけのものではありません。このカリキュラムが広く活用され、外国にルーツを持つ子どもが、日本の小中学校で生活していくための最低限の日本語を身に付け、友達をつくりながら適応できるようになるとともに、日本人の子どもが「広い視野をもって異文化を理解し共に生きていこうとする姿勢」（学習指導要領解説総則編）を育むことにもつながることを期待しています。

６　カリキュラムのねらいに適した市販の資料等を使用

なお、本カリキュラムでは、『日本語学級Ⅰ　初期必修の語彙と文字』（凡人社）、『ひろこさんのたのしいにほんご１　ひらがな・かたかな・かんじ　れんしゅうちょう』（凡人社）、『ひらがなカード』（くもん出版）、『ゆびなぞりカード　ひらがな』（くもん出版）、『こどもにほんご宝島』（アスク出版）等の市販の書籍や教材を使用しています。

これらの教材等は、本カリキュラムのねらいに適合し、入手しやすい物であることを基準に選びました。是非、日本語初期指導を必要とする外国にルーツを持つ子どもが在籍している各学校では、これらを参考にして、子どもに合った教材・資料を用意してください。また、自作のひらがなカード等、指導者の方が慣れ親しんでいる同様の教材があれば、これらもぜひ活用してください。